

## 茅門のある町へ

### 〜 鹿児島帰省

山本 洋子



来年に大学受験を控えた娘の希望の大学が鹿児島大学の天文学科ということで、受験の前に一度大学を下見したいとの娘の希望もあり、コロナ禍ではあったが、久しぶりに父と姉の顔も見たいし思いきって娘と中学一年生の息子連れて帰省することにした。

母が急逝して早いもので十年が過ぎ、四年ぶりの帰省となった。姉に連絡すると福岡に住む甥の息子二人も予定を合わせて鹿児島へ来てくれるという。甥の息子は姉の孫にあたるわけだが、上の子が中学二年、下が小学校六年で、ちょうど私の息子が真ん中に並び、小さい頃から夏休みになると姉のお世話にな

って遊んでもらっていた仲なのだ。

早割で飛行機のチケットを確保していたものの、出発の三週間ほど前に航空会社から新型コロナウイルスの影響に伴う需要減退等によりやむを得ず欠航という案内のメールが届いた。早速、姉に連絡し半分帰省を諦めていたものの、夫から格安航空会社なら運航しているのではないかというアドバイスを受け、その日の晩に調べてなんとか往復のチケットを予約することができた。それから台風が三つも同時に発生したり、本当に出発するまで気が気でない日が続いた。

そしていよいよ出発当日、台風も去った後で羽田空港は快晴であった。無事に飛行機は離陸し、定刻より少し早い十七時二〇分に鹿児島へ到着した。

空港から実家までは空港バスに乗り最寄りのバス停まで姉が車で迎えに来てくれるこ

とになっている。バスの乗車切符を三枚購入し、時間を確認するとなんと一六時丁度発の次が一九時の最終となっている。停留所の案内をよく見ると、何本か白く消されている。どうやらバスもコロナの影響で本数を減らしているようだ。

仕方ないので、帰りの飛行機が朝早いこともあり、先にお土産を物色して時間を潰すことにした。姉に連絡を入れると、昼間に福岡から来ている姉の孫たちは首を長くして夕飯も我慢して待つてくれているという。バスに乗り込んだ頃にはもう景色も真つ暗であった。

次の日から九州地方は大雨に見舞われた。娘は二日目の朝、雨のなか、バスを乗り継ぎ鹿児島大学周辺を下見したのち、受験生ということもあり、三泊して東京へ帰った。私と息子は一週間滞在したのだが、稀にみる雨続きで、私が外出したのは二度ほど姉の買出し

の付き添いにAコーブまで行ったのみである。息子たちに至ってはほぼ毎日、各自が持参してきたゲーム機とにらめっこするか、トランプでカードゲームをして過ごしていた。

そして、今だから帰省したと言えるが、帰省中は決して表にばれることのないようにとのことで、来客があると、まるで戦時中の戦犯扱いのように潜伏して息をひそめていた。

なにもかもコロナウイルスの出現で本当に世の中と意識が変わってしまった。コロナ禍で大変な思いをして帰省し、大雨で散歩もままならず、姉や甥たちや息子と輪になって遊んだ大貧民やセブンブリッジも子供たちが大人になったときに、それはそれできっと楽しい思い出として刻まれていることだろう。

これから先も未知なるウイルスとの闘いや天災などどうあがいてもどうしようもないことが続くに違いない。それでも人間は生き



ていかなければならない。どんなに絶望的なことがあってもそこから正しく生きる意味を見出していかなければならない。

アウシュビッツで通ずる強制収容所を体験した心理学者のヴィクトール・E・フランクルの「夜と霧」を読みたくなった。



入来麓（重要伝統的建造物群保存地区）の玉石垣